

随想

黛元をめぐる

リーダーのない集団はこわい

会員 市野 源 仁

二十六日の日曜日、同僚六人と互助会主催の黛元巡りに参加した。

六台のバスは、二つに分かれて、大分駅前を午前八時過ぎ出発した。

車中一行は、福岡県の小石原と、高取へ行き、それから日田へ小鹿田へおんたへ行くことを知らされた。

やがて、文登る湯煙を窓越しに見て、奥別荘へ入った。

もみじ葉の いまだ残れる 由布山の

麓の里に 一夜寝て見ん

田山茶袋の歌を小声で吟じながら、耳のあたりには、由布の峰を眺める旅は最高である。

私達は心ゆくまで陶器を見ようと思つて、バスの中で食事をとった。

第一の黛元、小石原は十数軒を数えて、沢山の品があったのに、わずかに四十分しかない。次の高取は一軒しかないのに四十分ばかりあった。

十年ぶりに訪問した日田の小鹿田に、私は新たな期待を持っていた。

それがどうであるう。

上手（か）及び（か）から下手（へ）して（し）て（て）十軒とも、はらばらとしが品物がないかた。黛元は前々のか、成型の品がかなり棚の上に並べているだけである。

一行はここで十分（じゅうぶん）買（か）うつもりだったのが裏切られたので、不満の音が絶えない。

おまけに一時聞もあるときている。

私は、これぞと思う作品にとうとう会えず、高取で、盃を一つ買っただけであつた。

帰りの時間は、ぐつと下つた。

くら闇の中に光る、水分峠の店の前でバスは停つた。制限時間も告げずに、休けいきとつたので、仲々会員がそろわない。

同僚の一人がたまりかねて、七時五十分茶の佐伯行き、最終バスに間に合うよう車掌に話した。

羊は断念していきがやつと闇に合つて、八時三十分頃佐伯に着いた。

シヤンとした、リーダーのいない集団はこわい。若し問題でも起きたら、どうするのだらうか。

考えてみると、今の世相も似ている点があるように思う。

私達は、読みの深い、リーダーを選ばなければ、どんな目に会うかも知れない。

(NHK「くらしのたより」放送原稿)